心の叫び

小倉　一純

大卒新入社員の初任地は製造所と決まっていた。

経理課を希望する文系出身者が皆無だったところ、「まぁ経理でもいいかッ！」と軽口を叩いたら、そこを人事部長に目ざとく見つかり、経理課に配属された。

とりあえずは簿記とは無縁の、積算と作表の仕事だった。原価計算係である。

当時はバブル景気以前で、日本の経済は、緩やかな右肩上がりだった。

定期昇給一万円、ベースアップ一万円、年間の給料は、ボーナスも含めて、十七ヶ月分というスタンダードが業界内には存在した。

だが、鉄鋼業は構造不況以来の斜陽産業で、やがて、それも有名無実と化していった。

転職した会社では、精密機械を製造していた。

苦手克服との思いから営業畑を希望し、そのとおりの配属となった。まるで受験生の発

想である。
　時代は、バブル景気を迎えていた。
　バブル景気とは、一九八六年に始まり、一九九三年に崩壊する、狂乱の時代だ。
　当時の時代を象徴するのは、なんといっても、「ジュリアナ東京」というディスコの「お立ち台」であろう。派手な衣装を身にまとったミニスカートの美女たちが時を忘れて踊り明かしていた。
　会社の経費で顧客と飲食することを、上司から大っぴらに褒められたのは、この時代だけだった。
　僕は機械オタクだがへそ曲がりで、仕事となると、自社が製造する製品の型番を覚えるのが大嫌いだった。
　前職に続き、今度も営業職を希望し、転職した。入社したのは、産業ガスを製造する、化学メーカーだった。
　そこで、まずは、医療用のガスを販売する

ことになった。

主な取扱商品は、ＭＲＩに充填する液体ヘリウムである。ＭＲＩとは、病院に設置された画像診断装置のことだ。

その翌年、当時虎ノ門にあった本社に併設された子会社へ出向となった。

役所に提出する文書や、自社の製造した機械の取り扱い説明書など、文章を書く仕事が多かった。

僕は、こういう仕事は好きだな、と思った。

だが結局、体調を崩し、筑波山の麓（ふもと）の工場へ転勤となり、現場仕事に汗を流すことになる。

当時、佐藤康夫という人物が、日本エア・リキードの副社長だった。

一方、大学時代をともに過ごした忘れ難い友人に、佐藤正道君がいた。

彼は、大阪の参天製薬・本社で、会長の片腕として、その辣腕（らつわん）ぶりを発揮していた。

偶然にも同じ佐藤姓を持つ二人だったが、

仕事を通じて友人関係を築いていた、という。

僕はといえば、その日本エア・リキードの筑波工場で、一介のブルーワーカーよろしく、立ち回っていた。

幼い頃、よく父に、

「お前みたいな怠け者は人生の落伍者になってしまうぞ！」

と、発破を掛けられたものだった。

それは、まるで呪いの言葉のように、現実のものとなってしまった。

旧帝大まで卒業しながら、もがくように会社にしがみついたが、結局、最後に得たのは、そういう境遇だった。

高校を卒業後、結婚も意識していた同級生に失恋して以来、僕の人生は、気が付いてみると、緩やかな右肩下がりとなっていた。

最初の製鉄会社は五年で退職をしたが、その間、実は二ケ月の入院生活を経験している。慣れない社会人生活で精神的な変調を来した

からだ。入院はそもそも僕の希望だった。

今考えてみると、都立高校卒業後の失恋が、その後の札幌での学生生活にも陰を落としていた。それが社会人となり、精神的な病として顕在化したのだ、と今は考えている。

時はやがて世紀末の二千年となり男の厄年四十二歳を迎えていた。

精神的にも、肉体的にも、限界を感じていた僕はその年、自分の会社員人生にピリオドを打たなければならなくなった。

しかし、おかしなことに、ある種の痛快な気分さえ覚えていた。

と同時に、嵐が過ぎ、荒波に揉まれた小舟がようやく静かな入り江を見つけたような、安堵にも似た感情があった。

「自分もとうとうここまで来たか！」

それらはやがて、自嘲（じちょう）と諦念（ていねん）、さらには奇妙な達成感も入り混じり、腹の奥底から湧きあがる、心の叫びとなっていった。